

初期日本映画における「女形」の受容とその美学

紙屋牧子（東京国立近代美術館フィルムセンター）

歌舞伎からの影響が色濃かった初期日本映画においては男性が「女」を演じていた。しかし、「女形」映画は、日本映画の欧米化と舞台芸術からの独立を目指して1918年、帰山教正らが提唱した「純映画劇運動」によって否定され、映画女優第一号となった花柳はるみ主演の『生の輝き』（製作：1918年製作、監督：帰山教正）以降、「女優」にとって変わられていったというのがこれまでの映画史で語られてきたストーリーである。

女形時代の日本映画にかんする先行研究においても、ほとんどの場合、「女形」はあくまで歌舞伎（旧劇）の影響下にある「女優」以前の未発達な存在という位置付けであり、基本的には「純映画劇運動」が提示した価値観に沿った観点から論じられている。それは例えば、映画における「女形」が、「偽物の女」、つまり単なる男に過ぎないと完全に否定されたことで、日本の映画女優の出現を実現させたというものであり、それでも「女形」の独自性（地方性）を考察したものはあるが、基本的には「女形」を肯定的存在としては扱っておらず、同時代的な受容のありよう（当時の観客が「女形」にどのような魅力を感じていたのか）についてはいまだ研究の余地があり、いまいちど、映画史における「女形」の意義について再検討する必要があるだろう。

発表者は、かつて確かに、映画のなかの「女形」は「美」あるいはある種の「崇拜」の対象として受容されていたのではないかと考える。映画俳優の尾上松之助（1875-1926）は多数の英雄豪傑を演じて日本初の映画スターとして君臨したが、一方で「女形」をもつとめることもあったことは興味深い。このような事例からは、役者が「女形」を演じ得ることに対するある種のステータスのようなものがあつたのではないかと考えられる。

尾上松之助は、日活京都撮影所（旧派）に所属していたが、日活向島撮影所（新派）には立花貞二郎（1893-1918）という「女形」のトップスターが在籍しており重用されていた。また、病身の立花貞二郎に代わってスターとなった衣笠貞之助（1896-1982）の映画デビューは、「純映画劇運動」が提唱された1918年であり、その後1920年代前半まで女形俳優として活躍したことを考えれば、「女形」から「女優」への転換期に、映画製作者および映画観客においてさまざまな葛藤があつたことが窺える。

以上のことをふまえて本発表では、日本映画における「女形」の存在意義を、数少ない現存フィルムおよび同時代の言説を分析することで再検討する。